

# 出産から育児期へ過渡期における母親意識の研究 — 夫の育児協力による影響の比較 —

植村 裕子<sup>1)</sup>, 内藤 直子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科,

<sup>2)</sup> 香川大学医学部看護学科

## Research of Consciousness of Mothers Who Are in Transition Period From Giving Birth to Child Care — Effect of Child Care Co-operation of Their Husbands —

Yuko Uemura<sup>1)</sup> \*, Naoko Naito<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> *Department of Nursing, Faculty of Health Sciences,  
Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

<sup>2)</sup> *School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University*

### Abstract

In this research, the questionnaires obtained from 280 mothers in transition period, who had 1 ~ 4 month-old infants, were investigated. It aims to clarify how their husbands' child care co-operation satisfies them in rearing their infants.

The mothers who responded the questionnaire, were divided into three groups according to the level of their husbands' co-operation.

As a result, it was primarily recognized that their child care co-operation satisfied more than half of them. Secondly, those who appreciated their co-operation, more willingly entrusted their infants to them, than those whose husbands were not co-operative. Thirdly, it was clarified that those who were satisfied with their husband's co-operation, developed their consciousness of being mother.

**Key Words:** 母親(mother), 夫(husband), 育児(child care), 協力(co-operation), 過渡期(transition)

\*連絡先: 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原 281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 植村 裕子

\*Correspondence to: Yuko Uemura, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

## 序 文

少産少子化の現在、子どもを産み、育てることは、女性の人生における選択肢の一つとなっている。このような女性が、母親へと移行していく時期は身体的にも精神的にも変化の激しい時期であり、本研究ではこの移行期を出産から育児期の過渡期として捉えた。そして、過渡期にある母親を理解することで、対象の理解に基づいた支援のあり方を見出せるのではないかと考えた。

現在、過渡期にある家族の特徴としては、核家族、共働き夫婦などがあげられる。このような背景から、過渡期にある母親は、子育ての最も重要なサポーターとして夫を認識している。これは、丸ら<sup>1)</sup>の乳幼児を育てる母親にとって最も重要なサポーターは夫である報告からも、夫の育児サポートは、過渡期にある母親に欠かせないものであることが考えられた。また、過渡期にある母親が認識する夫の育児協力の効果として、坂間ら<sup>2)</sup>は、夫からのサポート感があることは母親の育児ストレスが低いことを明らかとし、夫の育児協力の効果として、母親の育児ストレスを抑制することが示された。さらに、金井<sup>3)</sup>は夫に対する評価の高い母親は、母親アイデンティティと母親役割に対する肯定的な感情が強いことを明らかにしており、母親自身の自己価値は夫に対する評価に影響していることが確認された。したがって、過渡期にある母親の重要なサポーターである夫の育児協力に対する認識は、母親意識に影響を及ぼすのではないかと推測した。

なお、これまでに母親意識に関する研究は多くあり、そのなかで今回、母親意識を測定する尺度として、過渡期にある母親が母親としての自己を自分自身で評価する尺度と母親としての役割受容の意識尺度を用いた。これら2つの尺度を用いることで、過渡期にある女性の母親意識が明らかにできるのではないかと考えた。

以上のことから、本研究では、出産から育児期の過渡期にある、産後1～4ヵ月の母親を対象に、母親意識として母親の自己の評価尺度および母親役割受容尺度を用いて、母親が認識する夫の育児協力による母親意識の相異について明らかにすることを目的とした。

〈用語の定義〉

過渡期：過渡期とは新しいものへと移っていく途中の時代<sup>4)</sup>であり、本研究では初めて子どもを

もつ女性が母親へと移行し、かつ2人目以上の子どもをもつ母親にとっては複数の子どもの母親へと移行する出産後から乳幼児を育てている時期とする。

## 方 法

### 1. 対象と調査期間

過渡期にある産後1～4ヵ月の母親440名を対象とした。出産後1～4ヵ月は、母親とその夫にとって育児の始まりの時期であり、この過渡期にある家族への支援を導く基礎的資料とするため、この時期の母親を対象とした。調査期間は2004年6月から9月。

### 2. 調査方法

過渡期にある母親を対象とした無記名の質問紙調査であった。A県下の病院および保健センターの乳児もしくは母親の産後1ヵ月健康診査および3、4ヵ月児乳児健康診査に来所した母親に対し、説明文にて同意を得た後に調査票を配布した。回収方法は待ち時間の間で記入し、その場で回収した方法と郵送による回収の方法であった。

### 3. 調査票の構成と内容

#### 1) 調査票の構成

調査票は主旨および倫理的配慮、連絡先を記載した説明文のあとに、各測定尺度、フェイスシートの順で構成した。フェイスシート内容は家族特性および夫の育児協力に対する認識の項目で、質問項目は択一回答式とした。夫の育児協力に対する認識として、「母親が認識する夫の育児協力の程度」は、1＝協力的である、2＝まあまあ協力的である、3＝あまり協力的でない、4＝協力的でない、「母親が認識する夫の育児協力に対して満足」の程度」は、1＝満足している、2＝まあまあ満足している、3＝やや不満である、4＝不満足の4段階評定とした。

なお、本研究では、夫の育児協力の程度およびその満足」の程度は、母親の主観的な判断に委ねた結果を用いた。したがって、本研究において、夫の育児協力の程度およびそれに対する満足」の程度は、産後1～4ヵ月の母親が認識するものとした。

#### 2) 測定尺度

##### ①母親の自己の評価の尺度

母親の自己の評価を測定する尺度として Pridham & Chang<sup>5)</sup> の「What Being the Parent of a New Baby Is Like : Revision of an Instrument (以下, WPL-R とする)」で中島<sup>6)</sup> の日本版「親であるとはどのようなものであるか (以下, WPL-R-J とする)」を用いた。この尺度は、3つの下位概念から構成された25項目の9段階評定尺度である。下位概念『育児の評価』11項目は、生まれた乳児の親としての満足感や育児を行う満足感などからなり、『子どもの中心性』8項目は、乳児と育児や身体健康が親の気持ちに占めていることからなり、『生活変化』6項目は、親の個人的な生活や自己イメージの変化、人生や家族メンバーとの関係の変化<sup>6)</sup> と定義されている。尺度の評点は、1. 全くそうではない=1点~9. とてもそう=9点であり、3項目は逆点入力で得点化した。

#### ②母親役割受容尺度

母親役割受容の尺度として大日向<sup>7)</sup> の作成した母親役割の受容に関する尺度(以下, 母親役割受容尺度とする)を用いた。これは母親自身が母親であることをどのように受け止めているかという、母親であることに対する受容の姿勢を問う母親役割の受容に関して、2つの下位概念『積極的・肯定的な意識』6項目と『消極的・否定的意識』6項目から構成された12項目の4段階評定尺度である。評定は、1. 全く違う=1点~4. その通り=4点で、消極的・否定的意識6項目は逆点入力で得点化した。

#### 4. 倫理的配慮

調査を依頼した施設長には、研究依頼書と調査票にて、研究の主旨を説明し調査を実施する同意を得た。対象者には研究の概要、プライバシーの保護、研究協力は任意であること、研究協力の有無により健康診査を受ける上での不利益を被らないこと、収集したデータは研究目的以外では使用しないこと、調査はすべて無記名であり個人が特定されないことを明記した説明文にて承諾を得た。説明文には研究者の連絡先を明記し、調査票における責任の所在を明らかにした。なお、調査票の回収をもって研究協力への同意と判断した。

また、WPL-R-J 尺度の使用は、事前に開発者へ文書にて本研究の主旨を説明し、開発者より文書にて本研究に使用する承諾を得た。

#### 5. 分析方法

母親が認識する夫の育児協力の程度およびそれに対する満足の程度のクロス集計、家族特性の記述統計、母親が認識する夫の育児協力と家族特性の $\chi^2$ 検定、関係性の強さは Pearson 積率相関を用いた。さらに、母親が認識する夫の育児協力の程度およびそれに対する満足の程度による WPL-R-J 項目および母親役割受容項目の平均得点の比較を一元配置分散分析および多重比較を行った。統計ソフトは SPSS13.0J for Windows を用い、有意水準は5%未満とした。

#### 結 果

産後1~4ヵ月の母親440名に質問紙を配布し回収数289、そのなかから有効回答数280(有効回答率63.6%)を分析対象とした。

表1 家族特性

		n=280	
項 目		(人)	(%)
家族形態	核家族	226	80.7
	拡大家族	47	16.8
	無回答	7	2.5
子どもの数	1人	144	51.4
	2人以上	135	48.2
	無回答	1	0.4
母親の平均年齢	30.3歳(SD4.7)		
母親の職業	有職	87	31.1
	無職	190	67.9
	無回答	3	1.1
夫以外の育児協力者	いる	233	83.2
	いない	47	16.8
子どもの悩みや心配	あり	178	63.6
	夫に相談する	169	94.9
	しない	9	5.1
	なし	101	36.1
	無回答	1	0.4
夫の平均年齢	32.1歳(SD5.4)		
夫の職業	有職	245	87.5
	無職	12	4.3
	その他	4	1.4
	無回答	19	6.8

#### 1. 家族特性

家族特性の結果については表1に示した。家族形態は核家族226名(80.7%)、拡大家族47

表2 母親が認識する夫の育児協力と夫の育児協力に対する満足

夫の育児協力に対する満足	夫の育児協力				計
	満足	まあまあ満足	やや不満	不満	
協力的	85	51	1	0	137
まあまあ協力的	6	72	33	2	113
あまり協力的でない	1	2	16	8	27
協力的でない	0	0	1	2	3
計	92	125	51	12	280

名(16.8%)であった。すべての母親に父親は存在しており、母子世帯はなかった。子どもの数は1名144名(51.4%)、2名以上135名(48.2%)であった。母親の平均年齢は30.3歳、母親の就業状況は育児休業中を含む有職87名(31.1%)、専業主婦である無職が190名(67.9%)、産後月齢は1ヵ月115名(41.1%)、3~4ヵ月165名(58.9%)であった。夫の平均年齢は32.1歳、夫の就業状況は有職245名(87.5%)であった。

表3 母親が認識する夫の育児協力によるWPL-R-J項目得点の比較

下位概念	WPL-R-J 尺度項目	F 値	多重比較		
			協力 (137)	やや協力 (113)	非協力 (30)
育児の評価	親であることに満足している		8.6±0.9	8.4±1.2	8.3±1.8
	赤ちゃんが育つことにより影響を与えている		6.7±1.5	6.5±1.4	6.3±1.6
	赤ちゃんの育児をすることに満足している		7.6±1.4	7.9±1.3	7.3±1.6
	ふれあいを楽しんでいる		7.7±1.4	7.8±1.4	7.8±1.3
	赤ちゃんが何を要求しているか分かる	**	6.6±1.4	6.1±1.5	5.7±1.5
	赤ちゃんは人格を持つ一人の人間である		8.5±1.2	8.6±0.7	8.4±1.1
	赤ちゃんのことがよく分かる		6.2±1.6	6.0±1.5	5.5±1.4
	赤ちゃんの親としての期待に沿っている		6.1±1.8	5.7±1.6	5.2±1.7
	赤ちゃんの発育は、満足のよりどころ		7.5±1.5	7.5±1.7	7.3±1.4
	赤ちゃんとの調子が合っている		7.5±1.3	7.4±1.5	7.0±1.6
赤ちゃんにかかわり、対処することに満足している		7.4±1.6	7.3±1.5	6.7±1.6	
子どもの中心性	家庭で赤ちゃんのことが気になる		8.3±1.1	8.5±0.7	8.2±1.2
	赤ちゃんから気をそらすことができる(逆点)		5.6±2.6	5.9±2.4	6.7±2.3
	赤ちゃんや育児のことが気にかかる		7.7±1.7	8.0±1.3	7.8±1.6
	誰かに預けて外出した時、赤ちゃんのことが気になる		7.6±1.7	7.8±1.6	7.3±2.3
	赤ちゃんの身体的な健康のことが気になる		8.2±1.6	8.5±1.1	8.6±0.7
	外出する時、夫に赤ちゃんを預けやすい(逆点)	***	3.0±2.1	4.8±2.5	6.5±2.3
	外出する時、夫以外の人に赤ちゃんを預けやすい(逆点)	*	4.1±2.5	5.0±2.6	5.3±2.7
他のことに比べて赤ちゃんや育児はあなたのなかで優先される		8.1±1.2	8.3±0.9	7.8±1.3	
生活変化	赤ちゃんが生まれてから生活が変わった		8.0±1.4	8.0±1.6	8.0±1.3
	家族とのかかわり方が変わった		7.0±2.2	7.3±2.1	6.4±2.1
	赤ちゃんの育児以外にもすることがありストレスがある	*	5.8±2.3	5.9±2.2	7.0±2.1
	自分自身に対する見方は変わった		5.8±2.3	5.8±2.3	5.4±2.6
	家族と一緒に過ごす生活は変わった	*	7.2±1.9	7.7±1.4	6.6±2.5
行動やその時間に影響を受けている		8.0±1.2	7.8±1.6	7.9±1.4	

(逆点)=逆点入力, \*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

2. 母親が認識する夫の育児協力

母親が認識する夫の育児協力の結果について表2に示した。夫の育児協力に対しては、「協力的である」と認識している母親137名(48.9%)が最も多かった。夫の育児協力に対しては、「まあまあ満足」と認識している母親125名(44.6%)が最も多かった。この2項目のクロス集計からは、夫は育児に協力してくれており、かつそれに対して満足をしているという認識の母親が85名(30.4%)であった。母親が認識する夫の育児協力とそれに対する満足の相関をみると、 $r = 0.73$  ( $p < 0.01$ )で強い相関関係があった。

母親が認識する夫の育児協力の程度と家族特性との $\chi^2$ 検定では、子どもの悩みや心配事があり、夫に相談する項目と $p < 0.0001$ であり、夫が育児に協力してくれているという認識の母親は、子どもの悩みや心配事を夫に相談しており、有意な関係が認められた。母親が認識する夫の育児協力に対する満足の程度においても同じ項目において、 $p < 0.0001$ であり、夫の育児協力に対して満足しているという認識の母親は、子どもの悩みや心配事を夫に相談しており、有意な関係が認められた。母親が認識する夫の育児協力とその他の家族特性との有意な差は認められなかった。

3. WPL-R-J尺度および母親役割受容尺度

用いた尺度のCronbachの $\alpha$ 係数は、

WPL-R-J尺度0.75, 母親役割受容尺度0.74であり、両尺度とも内的整合性は保たれていた。項目の平均得点はWPL-R-J尺度 $7.1 \pm 0.7$ 点, 母親役割受容尺度 $3.0 \pm 0.4$ 点であった。

4. 母親が認識する夫の育児協力とWPL-R-Jおよび母親役割受容項目との比較

1) 母親が認識する夫の育児協力の程度によるWPL-R-Jおよび母親役割受容項目の比較

母親が認識する夫の育児協力に対する回答で、「1=協力的である」137名(48.9%)を協力群, 「2=まあまあ協力的である」113名(40.4%)をやや協力群, 「3=あまり協力的でない, 4=協力的でない」30名(10.7%)を非協力群と3群に分け, 3群間のWPL-R-J尺度および母親役割受容尺度の項目の比較を一元配置分散分析, 多重比較を行った。

WPL-R-J項目における3群間の一元配置分散分析の結果(表3)は, 下位概念『育児の評価』の「赤ちゃんが何を要求しているか分かる」1項目で有意な差が認められ, 協力群は非協力群に比較して有意に高かった。

下位概念『子どもの中心性』の「外出する時, 夫に赤ちゃんを預けやすい」, 「外出する時, 夫以外の人に赤ちゃんを預けやすい」2項目で有意な差が認められた。特に「外出する時, 夫に赤ちゃんを預けやすい」では非協力群は協力群およびやや協力群, やや協力群

表4 母親が認識する夫の育児協力による母親役割受容項目得点の比較

下位概念	母親役割受容尺度項目	F値	多重比較		
			協力 (137)	やや協力 (113)	非協力 (30)
消極的意識	子どもを育てることが負担に感じられる	*	3.0±0.9	3.1±0.8	3.0±0.7
	育児にたずさわっている間に、世の中から取り残されるように思う		2.9±0.9	2.9±0.9	2.4±0.9
	自分の関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなる		2.8±0.8	2.6±0.8	2.4±0.7
	自分は母親として不適切なのではないだろうか		3.0±0.7	2.9±0.8	2.8±0.6
	子どもを生まないほうがよかった		3.9±0.3	3.9±0.3	3.8±0.5
母親であるために自分の行動がかなり制限されている	1.9±0.8	2.0±0.7	1.6±0.7		
積極的意識	母親であることが好きである		3.4±0.8	3.5±0.7	3.5±0.7
	母親になったことで人間的に成長できた		3.2±0.7	3.2±0.8	3.5±0.6
	母親としてふるまっている時が一番自分らしい		2.3±0.6	2.5±0.7	2.2±0.6
	母親であることに生きがいを感じている		3.1±0.8	3.2±0.8	3.2±0.8
	母親になったことで、気持ちが安定して落ち着いた母親であることに充実している		2.8±0.8	2.9±0.8	2.7±0.6
			3.3±0.7	3.4±0.6	3.3±0.5

n=280

消極的意識項目は逆点入力, \* $p < 0.05$

は協力群に比較して有意に高かった。

下位概念『生活変化』の「赤ちゃんの育児以外にもすることがありストレスがある」、  
「家族と一緒に過ごす生活は変わった」2項目に有意な差が認められた。特に「赤ちゃんの育児以外にもすることがありストレスがある」では、非協力群は協力群に比較し有意に高かった。

母親役割受容項目における3群間の一元配置分散分析の結果(表4)は、下位概念『消極的意識』の「育児にたずさわっている間に、世の中から取り残されるように思う」1項目に有意な差が認められ、非協力群は協力群およびやや協力群に比較し有意に低かった。

2) 母親が認識する夫の育児協力に対する満足  
の程度によるWPL-R-Jおよび母親役割受容

表5 母親が認識する夫の育児協力に対する満足によるWPL-R-J項目得点の比較

下位概念	WPL-R-J 尺度項目	F 値	多重比較		
			満足 (92)	やや満足 (125)	不満足 (63)
育児の評価	親であることに満足している	*	8.7±0.8	8.5±1.0	8.2±1.7
	赤ちゃんが育つことにより影響を与えている	**	7.0±1.5	6.5±1.4	6.2±1.4
	赤ちゃんの育児をすることに満足している		7.9±1.2	7.6±1.4	7.5±1.5
	ふれあいを楽しんでいる		7.8±1.5	7.8±1.3	7.6±1.5
	赤ちゃんが何を要求しているか分かる	**	6.7±1.3	6.3±1.4	5.8±1.8
	赤ちゃんは人格を持つ一人の人間である		8.7±0.7	8.5±1.2	8.5±1.0
	赤ちゃんのことがよく分かる	*	6.4±1.5	6.0±1.5	5.6±1.6
	赤ちゃんの親としての期待に沿っている	**	6.4±1.7	5.7±1.7	5.4±1.7
	赤ちゃんの発育は、満足のよりどころ		7.6±1.6	7.4±1.6	7.4±1.6
	赤ちゃんとの調子が合っている	*	7.7±1.2	7.3±1.4	7.0±1.6
子どもの中心性	赤ちゃんにかかわり、対処することに満足している	*	7.6±1.6	7.3±1.5	6.8±1.5
	家庭で赤ちゃんのことが気になる		8.3±1.0	8.5±0.9	8.4±0.9
	赤ちゃんから気をそらすことができる(逆点)		5.6±2.8	5.8±2.5	6.3±2.2
	赤ちゃんや育児のことが気にかかる		7.7±1.6	7.9±1.5	7.9±1.4
	誰かに預けて外出した時、赤ちゃんのことが気になる		7.8±1.7	7.8±1.6	7.3±2.2
	赤ちゃんの身体的な健康のことが気になる		8.2±1.7	8.4±1.2	8.5±1.1
	外出する時、夫に赤ちゃんを預けやすい(逆点)	***	3.0±2.4	3.9±2.2	6.1±2.3
	外出する時、夫以外の人に赤ちゃんを預けやすい(逆点)	*	4.0±2.6	4.9±2.5	4.9±2.7
生活変化	他のことに比べて赤ちゃんや育児はあなたのなかで優先される		8.1±1.2	8.3±1.0	8.0±1.1
	赤ちゃんが生まれてから生活が変わった		7.8±1.6	8.1±1.5	8.2±1.2
	家族とのかかわり方が変わった		6.9±2.4	7.1±2.1	6.9±1.9
	赤ちゃんの育児以外にもすることがありストレスがある	**	5.7±2.3	5.8±2.2	6.9±2.1
	自分自身に対する見方は変わった		5.8±2.5	5.9±2.2	5.4±2.3
家族と一緒に過ごす生活は変わった		7.2±2.0	7.6±1.5	7.2±2.0	
行動やその時間に影響を受けている		8.0±1.3	7.9±1.5	7.9±1.3	

(逆点) = 逆点入力, \*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

## 項目の比較

母親が認識する夫の育児協力に対する満足の回答で、「1=満足している」92名(32.9%)を満足群、「2=まあまあ満足している」125名(44.6%)をやや満足群、「3=あまり満足していない, 4=不満足である」63名(22.5%)を不満足群と3群に分け, 3群間のWPL-R-J尺度および母親役割受容尺度の項目の比較を一元配置分散分析, 多重比較を行った。

WPL-R-J項目における3群間の一元配置分散分析の結果(表5)は, 下位概念『育児の評価』の「親であることに満足している」, 「赤ちゃんが何を要求しているか分かる」, 「赤ちゃんのことがよく分かる」, 「赤ちゃんとの調子が合っている」, 「赤ちゃんにかかわり, 対処することに満足している」5項目に有意な差が認められ, 満足群は不満足群に比較して有意に高かった。また, 「赤ちゃんが育つことにより影響を与えている」, 「赤ちゃんの親としての期待に沿っている」2項目にも有意な差が認められ, 満足群はやや満足群および不満足群に比較し有意に高かった。

下位概念『子どもの中心性』の「外出する時, 夫に赤ちゃんを預けやすい」, 「外出する時, 夫以外の人に赤ちゃんを預けやすい」2項目に有意な差が認められた。特に「外出す

る時, 夫に赤ちゃんを預けやすい」では, 不満足群はやや満足群および満足群, やや満足群は満足群に比較し有意に高かった。

下位概念『生活変化』の「赤ちゃんの育児以外にもすることがありストレスがある」1項目に有意な差が認められ, 不満足群は満足群およびやや満足群に比較し有意に高かった。

母親役割受容項目における3群間の一元配置分散分析の結果(表6)は, 下位概念『消極的意識』の「自分の関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなる」, 「自分は母親として不適切なのではないだろうか」2項目に有意な差が認められ, 満足群はやや満足群に比較し有意に高かった。

## 考 察

出産から育児期の過渡期にある母親を対象として, 母親が認識する夫の育児協力による母親の自己の評価と母親役割受容の比較を分析した。その結果, 母親が認識する夫の育児協力とそれに対する満足の程度によって, 母親の自己の評価と母親役割受容の項目に有意な差が認められ, 母親が認識する夫の育児協力により, 母親意識の相異があることが明らかになった。

表6 母親が認識する夫の育児協力に対する満足による母親役割受容項目得点の比較

n=280

下位概念	母親役割受容項目	F 値	多重比較		
			満足 (92)	やや満足 (125)	不満足 (63)
消極的意識	子どもを育てることが負担に感じられる		3.1±0.8	3.0±0.9	3.0±0.8
	育児にたずさわっている間に, 世の中から取り残されるように思う		3.0±0.9	2.8±0.9	2.7±0.9
	自分の関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなる	*	2.9±0.8	2.6±0.7	2.6±0.9
	自分は母親として不適切なのではないだろうか	*	3.1±0.7	2.8±0.7	2.8±0.7
積極的意識	子どもを生まないほうがよかった		3.9±0.3	3.8±0.4	3.8±0.4
	母親であるために自分の行動がかなり制限されている		2.1±0.9	1.9±0.7	1.8±0.7
	母親であることが好きである		3.4±0.8	3.5±0.7	3.4±0.8
	母親になったことで人間的に成長できた		3.3±0.7	3.2±0.7	3.3±0.8
	母親としてふるまっている時が一番自分らしい		2.4±0.6	2.4±0.7	2.3±0.6
	母親であることに生きがいを感じている		3.1±0.9	3.1±0.8	3.1±0.8
	母親になったことで, 気持ちが安定して落ち着いた		2.9±0.9	2.8±0.8	2.7±0.8
	母親であることに充実している		3.4±0.7	3.4±0.6	3.3±0.6

消極的意識項目は逆点入力, \*p&lt;0.05

## 1. 母親が認識する夫の育児協力状況

対象の8割が核家族であり、夫は母親の最も身近な育児サポーターであることが考えられた。その夫の育児協力に対しては、やや協力的を含むと約9割の母親が、協力してくれているという認識であった。岡本ら<sup>9)</sup>の乳幼児をもつ母親を対象とした結果、夫の育児への参加状況は約9割である報告から、本研究においても同様の結果が得られ、本研究対象の夫は育児に協力的であることが窺えた。また、夫の育児協力に対する満足度は、やや満足を含むと約8割の母親は満足をしているという認識であった。渡部ら<sup>9)</sup>の0～4歳児の子どもを持つ母親を対象とした結果、約7割の母親は夫の育児協力に満足であるという報告と同様な傾向がみられた。さらに、半数以上の母親は夫の育児協力に対して協力的であるという認識であり、かつその協力に対して満足しているという認識であることが明らかとなった。つまり、過渡期にある母親は、夫の育児協力に対して肯定的な評価をしている者が多かった。一方、約1割の母親は、夫の育児協力に対して非協力であるという認識であり、かつその協力に対しても不満足であるという認識であった。また、夫の育児協力に協力的であるという認識の母親であっても、その協力に対して不満足であるという認識であったり、夫の育児協力に非協力であるという認識の母親であっても、その協力に対して満足であるという認識であった。このことから、母親が認識する夫の育児協力の程度とそれに対する満足度の間にずれが生じている母親もおり、これらの対象については、母親の認識に関連する要因を今後さらに検討していく必要がある。

## 2. 夫の育児協力に対する母親の肯定的な評価と母親意識

母親が認識する夫の育児協力の程度およびそれに対する満足度の3群間におけるWPL-R-J尺度項目と母親役割受容尺度項目の比較を分析した結果、以下のことが考察された。

母親が、夫は育児に協力的であるという認識で、その協力に対して満足であるという認識、すなわち、夫の育児協力に対して肯定的な評価をしている母親の特徴としては、外出時には夫に赤ちゃんを預けやすいことが明らかとなった。

このことから、夫の育児協力に肯定的な評価をしている母親は、夫に安心して子どもを任せることができ、子どもから離れて自分自身の時間を作りやすいことが窺えた。初めて生後数日の子どもをもつ父親を対象とした調査では、父親は子どもに対して小さく、繊細で壊れやすいものと認識し、育児に対して怖い思いを抱く報告<sup>10)</sup>からも、生後間もない時期の子どもを父親である夫が、一人で赤ちゃんを預かることは、不安を抱えることとなる。しかし、母親が育児経験を経ることで育児への自信をもつことにつながることも同様に、夫が日々の育児に母親と共に関わることによって、夫も少しずつ育児への自信が芽生えるのではないかと考えた。したがって、夫が育児に協力することは、母親にとっての利点だけでなく、夫自身の父親としての自己の成長へと繋がることを推察された。

第二に、夫の育児協力に肯定的な評価をしている母親は、母親役割受容の消極的な意識と有意な差が認められた。つまり、夫の育児協力に肯定的な評価をしている母親は、育児に携わっている間に、世の中からとり残されたり、母親として不適切なのではないかなど消極的な意識が低いことが明らかとなった。これは宮中<sup>11)</sup>の産後10ヶ月の母親を対象とした結果、母親役割受容項目を含む母親意識が高い母親は、父親の精神的支援が高く、父親の育児家事支援に最も満足度が高い報告と同傾向を示していた。つまり、産後1～4ヶ月の母親においても母親意識を高めるには夫の育児協力が必要であることが推察された。したがって、夫の育児協力に肯定的な評価をしている母親は、夫が育児に協力してくれることにより、自分の関心が子どもばかりに向き、視野が狭くなるなど否定的な思いを回避できることが考えられた。

第三に、母親は夫の育児協力の評価のなかで、夫の育児協力の程度より夫の育児協力に対する満足度の程度が肯定的な認識であるほうが、子どもの親としての満足感や育児を行う満足感、子どもを理解して、親としての自分自身の期待に沿っていることを実感していることが明らかになった。これは、母親の育児に対する価値は、育児への苦手意識や夫の育児態度に対する不満と関連がある結果<sup>12)</sup>と同傾向を示していた。つまり、夫の育児協力に対する満足度の程度が肯



定的な評価である母親のほうが、母親自身の育児に対する評価を高めることに繋がっていくことが考えられた。したがって、母親自身の育児に対する評価を高めるためには、夫が育児に協力していることに対する母親の満足感が必要となる。そのために、父親には、このような思いを抱いている母親への理解や育児協力に関する母親の満足感が得られるような具体的な支援方法について検討していくことが必要である。また、夫の育児協力に対して母親の育児満足は、1日の対話時間が長いほど有意に高いという報告<sup>9)</sup>にもあるように、家族のなかで育児を分担しながら、育児について話し合える環境の重要性を提唱していきたいと考える。

第四に、夫の育児協力を肯定的な評価をしている母親より否定的な評価をしている母親のほうが、日常生活のなかでストレスを感じていることが明らかとなった。これは、坂間らの結果<sup>2)</sup>と同様な傾向がみられ、夫の育児協力の程度は、母親のストレスに影響を及ぼすことが示された。すなわち、夫の育児協力を肯定的な評価をしている母親は、母親自身のストレスを軽減することに繋がることが考えられた。したがって、過渡期にある母親への育児支援には、夫の育児協力に関する情報が不可欠であり、夫の育児協力状況に応じた母親への具体的な支援を考えていくことが重要である。

## 結 論

出産から育児期の過渡期にある産後1～4カ月の母親280名を対象として、母親が認識する夫の育児協力により母親意識として母親の自己の評価(WPL-R-J)および母親役割受容項目との比較分析を行った結果、以下の結論を得た。

1. 過渡期にある母親の半数以上は、夫の育児協力に対して協力的であり、かつその協力に対して満足であるという認識であった。
2. 母親が認識する夫の育児協力により母親意識の比較をした結果、特徴としては、夫の育児協力を否定的な評価をしている母親より肯定的な評価をしている母親のほうが、子どもを安心して夫に任せることができる。
3. 母親が認識する夫の育児協力のなかで、夫の育児協力の程度に比べ、夫の育児協力に対する

満足度のほうが、母親意識項目との有意な差が多く認められた。つまり、過渡期にある母親は、夫の育児協力に対して満足感が得られることで、母親意識を高められることが明らかになった。

## 文 献

- 1) 丸光恵, 兼松百合子, 奈良間美保, 工藤美子, 荒木暁子, 白畑範子ほか (2001) 乳幼児期の子どもをもつソーシャル・サポートの特徴. 小児保健研究 60(6): 787-797.
- 2) 坂間伊津美, 山崎喜比古, 川田智恵子 (1999) 育児ストレスの規程要因に関する研究. 日本公衆衛生雑誌 46(4): 250-261.
- 3) 金井幸子 (2003) 乳幼児期の子どもをもつ母親の自己評価と夫に対する評価. 小児保健研究 62(5): 552-557.
- 4) “広辞苑”, 第5版, 岩波書店, 東京.
- 5) Pridham FK, Chang SA (1989) What Being the Parent of a New Baby Is Like: Revision of an Instrument. Research in Nursing & Health 12: 323-329.
- 6) 中島登美子 (2000) 親であるとはどのようなものか 日本版の信頼性・妥当性の検討. 日本小児看護学会誌 9(2): 45-50.
- 7) 大日向雅美 (2000) “母性の研究”, 第6版, 川島書店, 東京, p135-169
- 8) 岡本絹子, 中村裕美子, 山口三重子, 奥山則子, 標美奈子, 渡部月子 (2002) 乳幼児をもつ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究. 小児保健研究 61(5): 692-700.
- 9) 渡邊タミ子, 鈴木奈緒, 長嶋純子, 横森愛子, 茂手木明美, 比江島欣慎 (2001) 父親の育児協力・夫婦の対話と母親の育児満足度との関連性. 山梨医大紀要 18: 47-53.
- 10) 光田咲子, 村上明美 (2002) 初めて子どもを持つ父親の育児観. 母性衛生 43(1): 67-72.
- 11) 宮中文字子 (2001) 「母親への発達」に影響する父親および家族の要因. 母性衛生 42(4): 677-685.
- 12) 清水嘉子 (2003) 母親の育児に対する信念と育児ストレスの関係. 小児保健研究 62(5): 558-568.

受付日 2005年10月31日